

シラス

いわし類の仔魚のことをシラスと呼び、その干したものがいわゆる釜あげやちりめんじゃこです。高知では、新鮮なシラスを、ドロメと称して生で食べる習慣もあります。特に小さなシラスをケジャコと呼ぶこともあります。



生物特性

シラスは、体色がまだ表れていない、透明な状態の仔魚です。卵からふ化後 20～60 日を経た、全長 15～35mm 程度のものが大半です。おもに大河川の河口付近が漁場となり、高知県でも各河川の河口に漁場が集中しています。

県内の漁獲動向

高知県内の漁獲量は昭和 40 年代に増加し、昭和 54 年（1979 年）に 6,028 トンのピークを迎えました。その後漁獲量は減少に転じ、平成 7 年（1995 年）以降は 1,000 トンを下回る年もありました。平成 15 年（2003 年）以降は 1,000～2,000 トンで推移しています（図 1）。

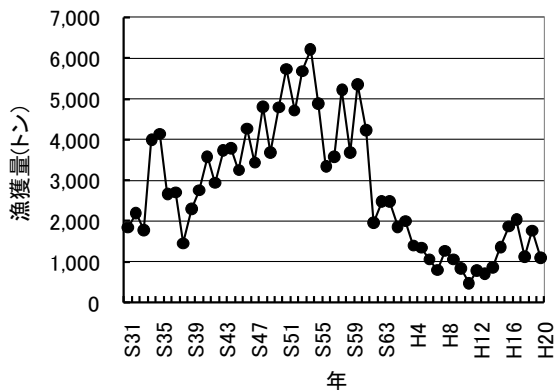


図 1 高知県におけるシラス漁獲量の推移。

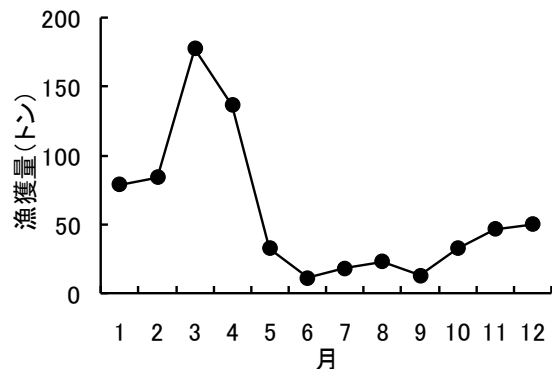


図 2 高知県の7水揚げ地の合計によるシラスの月別漁獲量。平成 11 年～平成 20 年の平均値で示す。

シラスは、主に土佐湾内の機船船曳網（通称パッチ網）で漁獲されます。1 年を通じて漁獲されますが、10～5 月に多く、6～9 月に少ない傾向があります（図 2）。

他県でシラスと言うと、一般にカタクチイワシの仔魚を指します。しかし、土佐湾で漁獲されるシラスは、カタクチイワシ、マイワシ、ウルメイワシの 3 種の仔魚からなっています（図 3）。3 種の組成には季節的な傾向があります。秋から冬、春にかけてはウルメイワシとマイワシのシラスが漁獲の主体になり、春から夏にかけてはカタ

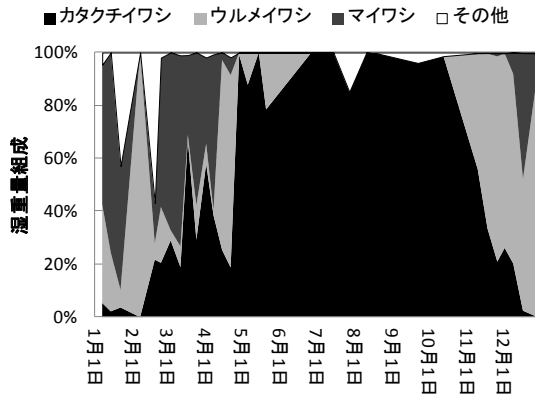


図3 高知県東部の安芸地区におけるシラスの種組成変化。平成21年のデータをもとに示す。

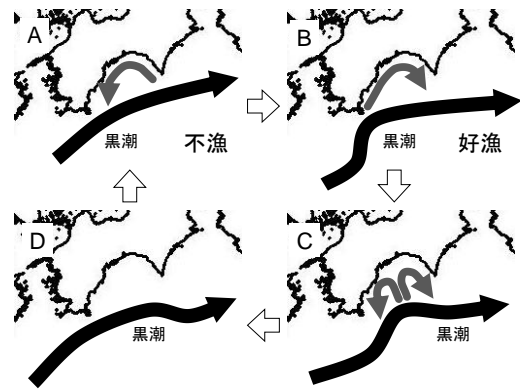


図4 土佐湾沖の黒潮小蛇行東進にともなう土佐湾内の流れ（灰色矢印）とシラス漁況の関係を表す模式図。Aの時に不漁、Bの時に好漁となることが多い。

カタクチイワシのシラスが主体となります。このように、シラスの種組成が季節的に変化する事は、他県ではみられない特徴で、土佐湾がマイワシやウルメイワシの主産卵場として貴重な海域であるということを反映しています。

シラスは小さく、みずから遊泳する力が弱いため、潮流をはじめとする海況条件によって来遊水準が大きく左右されます。土佐湾における過去10年間のシラス漁況と、黒潮の流路の関係について調べると、黒潮が足摺岬沖、室戸岬沖で接岸し、直線的な流路をとって安定しているときは不漁になる傾向がありました(図4A)。一方、黒潮の小蛇行が発生し、都井岬沖から四国沖を通過する前後に、シラスが好漁になることが多いということもわかりました(図4B)。これは、黒潮が接岸すると、土佐湾内に強い左回りの流れが発生し(図4A)、シラスが流されてしまうことや、黒潮由来の栄養に乏しい海水が土佐湾に流入してシラスの餌環境が悪くなることなどが原因と考えられます。